

資料渉猟余話

その16

少年の日、怪盗アルセーヌ・ルパンの活躍に心躍らせた読者諸賢も多いにちがいない。大正7年、モーリス・ルブラン作「奇巖城・怪紳士」が「アルセーヌ・ルパン叢書第1編」として金剛社から出版されるや爆発的な人気を呼び、早速シリーズ化、ルパン全集全12巻別巻2を出すまでになった。このルパンシリーズの口火を切った傑作長編「奇巖城」（原題は「虚ろの針」の意）の訳題を考案し、翻訳したのが保篠龍緒である。

この表題も現在の翻訳者たちも採用する名タイトルとなっているが、実はフランス語の「Lupin」を「ルパン」とする表記（「Lu」の発音は「ル」より「リュ」に近い）

は保篠が考案者である

言われる。保篠訳は、必ずしも原文に忠実ではない、厳密な全訳ではないとの指摘もあるが、格調高い名調子保篠流で知られ、長く「ルパンといえば保篠訳」という時代が続いた。

「ルパン」表記の生みの親は飯田出身!?

嶋 不濁

この保篠龍緒こと星野辰男、実は飯田高校同窓会名簿（明治43年3月卒）に北原寛（寛サ、後に飯田高校の名物教師となる）らに混じってその名前がある。

東京外国語学校仏語科卒業後、文部省勤務。大正7年、神田の書店で、ルブラン作「怪盗紳士ルパン」の

原書（フランス語）を見かけ、ユニークな題名にひかれて購入、読んでみたら星野自身が内容の面白さに引き込まれ翻訳をしたという。役人としての立場上、本名で翻訳活動にあたることを憚り、本名の漢字を入れ替えて筆名とした。保篠が翻訳家として活躍し始めた当時は、著作権の概念はまだ一般的でなかったが、保篠はルブランに翻訳権料を支払い、正式に権利を取得したうえで翻訳を行なった。ルブランから原稿をそのまま入手して翻訳にあたることもあったという。大正9年に、青少年向けの読物雑誌として創刊され、江戸川乱歩・横溝正史らを輩出、

戦前の推理小説ブームの火付け役となった雑誌『新青年』（博文館）の創刊号に「白骨の謎」（フリーマンの「オシリスの眼」）を翻訳、掲載している。

この星野辰男の父は、星野三郎といい、正木敬二（伊那）573号）によれ



任するなど、明治末から大正期にかけて峡谷の思想に少なからぬ影響を与えた人物であった。捨てないで!!

ば、維新後、自由民権運動の活動家として諏訪新聞主筆をつとめていたが、明治15年「深山自由新聞」社主森多平を頼って来飯、社員となった元金沢藩士である。度重なる発行禁止で深山自由新聞が廃刊した後も、

星野は江戸町で活版所を開業し、明治29年9月発刊された『松のおち葉』（北原痴山編・松尾多勢子追悼集）巻末に漢文の「松尾多勢子伝」を執筆している。さらに明治35年、大日本実行会下伊那支部が設立されるや痴山とともに支部幹事に就任するなど、明治末から大正期にかけて峡谷の思想に少なからぬ影響を与えた人物であった。捨てないで!!

の活動に草創期の推理小説がよく寄贈されるので首を傾げていたが、意外にこんなところに繋がっているのかもしれない。

保篠龍緒の本は現在南信州図書館ネットワークで検索しても残念ながらこの図書館の蔵書にもない。